『メノン』篇における想起とアポリア

田　中　伸　司

「徳というものは、はたしてひとに教えることのできるものなのか、こういう問題にあなたは答えられますか、ソクラテス[1]」(70a1－2)。メノンはこのように問い、そして「徳とは何であるのか」(71d5) を「語るのは別にむずかしいことではありません」(71e1) と高言する。さらにメノンは「徳とは何であるか」についての自分の答えが退けられたとき、探求そのものについてのパラドクスを提出している[2]。これに対してソクラテスは「探求することは、全体として、想起なのである」(81d4－5) と主張し、メノンの召使いの少年を相手とした実験を行い、この主張を証明しようとする。本稿が明らかにしようと試みるのは、ソクラテスの探求が想起として捉えられつつも、探求の実情としてはアポリアへと陥ることの意味である。本稿はまず［1］メノンのパラドクスとは何であるのかを確認し、つぎに［2］想起の実験と想起説がメノンのパラドクスに対してどのような答えとなっているのかを明らかにし、そして結びとして［3］探求を想起と捉える意味を考察したいと考えている。ただし、［3］の考察については、なお試論の域を脱していないことを予めお詫びしておく。

［1］想起の実験がメノンのパラドクスにどのように答えているのかということは、研究者たちによって問われてきた[3]。たとえば、メノンのパラドクスは、

---

[1] 引用は『メノン』篇からのものである。テクストはBurnet校訂のOCTを用い、引用・参照箇所にはステファヌス版の頁番号・段記号に段内行数を添えた。翻訳は、藤沢令夫訳（岩波文庫）を、一部論述の都合により改変させて、使用させていただいた。

[2] 後述するメノンのパラドクスについては、それを探求の可能性についてのそれと見るのか、あるいは知識の発見の可能性についてのそれと見るのかという、二つの解釈がある。近年の研究にかんする明快な整理と評価が金山弥平「メノンを知ること―メノンのパラドクスと想起説―」内山勝利・中畑正志『イリソスのほとり』(世界思想社 2005) pp. 45-73にある。本稿は基本的に探求に対するパラドクスと見るものであるが、これら二つの解釈の間に深刻な対立は見ない。なぜなら、それがソクラテスに対する反論である限り、知識に至ることへのパラドクスともなるからである。

[3] e. g. Roslyn Weiss, *Virtue in the Cave: Moral Inquiry in Plato's Meno* (Oxford University Press

後述のように、知の不在という条件での知の探求の可能性を問題としている。ところが、想起の実験においては、ソクラテスとメノンという二人の知者が存在している。二倍の面積をもつ正方形を求めよという問題について、ソクラテスとメノンは明らかに正解を知っているからである。しかも、正解を知っているメノンによって、想起の実験の成否が判定される。したがって、想起の実験の成功は、知の不在という条件での知の探求の可能性を確保するものではないと。

たしかに、想起の実験とメノンのパラドクスとの間にはずれがある。しかし、研究者たちが指摘するようなずれは表層的なものであり、その底には探求をめぐる対立がある。本節ではこの対立を明らかにするために、まずメノンのパラドクスとは何であるのかを確認する。そのうえで想起の実験がどのようにパラドクスに対応しようとしているのかという考察へと進むことにしよう。

メノンのパラドクスは知を有していない人による探求の不可能さを言い立てている。

「ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかがあなたにぜんぜんわかっていないとしたら、どうやってそれを探求するおつもりですか。というのは、あなたが知らないもののなかで、どのようなものとしてそれを目標に立てたうえで、探求なさろうというのですか。あるいは、幸いにしてあなた

2001） pp. 65-75, 81-3, 99-100. Cf. R.S.Bluck Bluck, *Plato's Meno*,（Cambridge University Press 1964）pp. 13-4, 45n.3, Jacob Klein, *A Commentary on Plato's Meno*,（the University of Chicago Press, Chicago edition 1989, originally by the University of North Carolina Press 1965）p. 107, Gregory Vlastos, "Anamnesis in the *Meno*" *Dialogue* 4 1965; reprinted in *Studies in Greek Philosophy* vol.2 ed. D. W. Graham（Princeton University Press, 1995）p. 159, Nicholas P.White, *Plato on Knowledge and Reality* (Hackett, 1976) pp. 40-61, Alexander Nehamas, "Meno's Paradox and Socrates as a Teacher" *Oxford Sturdies in Ancient Philosophy* 3（1985）pp. 6-11, 17-24, Hugh H.Benson, "Meno, the Slave Boy and Elenchos" *Phronesis* XXXV/2 (1990) pp. 134-6, Dominic Scott, *Recollection and Experience; Plato's theory of learning and its successors* (Cambridge University Press 1995) pp. 37-8. 金山弥平（2005）pp. 67-70. なお、ソクラテスの語り直しによってパラドクスの構成に違いが生じているが、研究者間でその評価について意見が分かれている。たとえば、J. Moravcsik, 'Learning as Recollection', Julius, "Learning as Recollection", in *Plato*, vol. 1, ed. G. Vlastos (University of Notre Dame Press edition 1978; reprint of the edition published by Anchor Books 1971) p. 57や神崎繁「知と不知の間―『メノーン』における探求のパラドクス」、哲学会編『哲学雑誌』95巻767号（有斐閣 1980）pp. 128-132, 136-137は語り直しによって生じた違いにプラトン―ソクラテスの直面していた問題の在り処が示唆されていると考えている。他方、N. P. White (1976) p. 56 n.17, T. Irwin, *Plato's Moral Theory* (Clarendon Press 1977) pp. 314-315 n.12, A. Nehamas (1985) pp. 9-11, H. H. Benson (1990) p. 131 n.14はそのような解釈を退けている。Cf. D. Scott (1995) pp. 26-27, n.2, 29-31.

がそれをさぐり当てたとしても、それだということがどうしてあなたにわかるのでしょうか。もともとあなたはそれを知らなかったはずなのに。」(80d5－8)

このメノンのパラドクスは知の獲得を端的に退けているわけではない。あらかじめ到達目標となる知を前提していなければ探求は不可能だと主張しているのである。すなわち、ソクラテスは探求の目標についての無知を表明しているが、そのように無知である人が到達目標となる知を有している人が誰もいないという状況下で、つまり知者の導きなしに、探求することは不可能だと指摘するものである。このようなメノンの言説にはソフィストの影がちらついている。ソクラテスは徳の教授可能性を問う『メノン』篇冒頭の問いにおいてすでに、メノンがソフィスト・ゴルギアスに象徴されるような「知恵」(70b4, cf. 70b1)に魅せられており、ゴルギアスと同じ言論を語っている（71d1－3）ことを指摘している[4]。このパラドクスもそうした類の借りものの言論であることは、メノンの「この言論がよくできているとは思えませんか」(81a1）ということばが示している。メノンはこのパラドクスをぶつけることによって、対話篇冒頭と同じように（70a1, 71b9－c2)、ソクラテスがいかなる知恵によってこうした「論争家好みの言論」(80e2）をのり切ろうとするのかを見ようとしている。もしメノンのパラドクスにメノンが期待するような仕方で応答しようとするならば、ソクラテスは自らの知の実演（cf.82a5－6）を行い、知者と承認される「知恵」を示すか、あるいは「論争家好みの言論」をくつがえす鮮やかな言論を提示してメノンを感心させるかの、どちらかを行うことになる[5]。

しかし、ソクラテスの探求はもともと、メノンが期待するソフィスト的な知恵とは対照的な営みである。たとえば、メノンのパラドクスが探求する人としてひとしなみに扱われる人びとを問題としているのに対して、想起の実験は問

---

[4] 後にはメノン自身によって交際の深さが示唆されている。95c1-4. *pace* N. P. White（1976）p. 46. また、メノンのパラドクスは、「あるいは」以下で前段において否定したことを「幸いにしてあなたがそれをさぐり当てたとして」と仮定しているように、重層的に議論が組み立てられているいるが、それはゴルギアスに特徴的な論法である。納富信留『ソフィストとは誰か？』(人文書院 2006）pp. 192-7, 214-9 参照。

[5] いずれにせよ、そこにはソフィスト的な知のepideixisが行われることとなる。82b2のepideixōmaiについては、G. Vlastos, *Socrates: Ironist and Moral Philosopher*（Cambridge U. P. 1991）p. 118 n.53は「提出、提示（exhibit)」という意味であって、*Gorg.* 479e8での「証明（apodeiksō)」とは異なっているとしている。なお、ソフィスト的な知のepideixis（およびその動詞形）については、E. R. Dodds, *Plato Gorgias,*（Oxford University Press 1959）p.189および Stallbaum, *Platonis Phaedrus; Menexenus; Lysis; Hippias Major; Hippias Minor; Io*（GarlandPub., 1980; reprint of various editions 1857）p.130を参照。

う人と答える人という関係を基礎としている。そして、メノンが探求すべき知をたとえばソフィストからであれ担保しているのに対して、ソクラテスは「知恵の旱魃でも起こったかのような」(70c4) 状況下ですなわち己の無知をあらかじめ表明して探求を進めている。ソクラテスの無知の自覚（e. g. 71a1－b3）から言うならば、想起の実験は対話による探求のモデルではあるが、けっしてソクラテスの知の実演ではないのである[6]。探求を行うことそのことについて、メノンとソクラテスは根本的に対立しているのである。

このような対立のゆえに、ソクラテスが想起の実験において問おうとするのは、対話相手の人柄や徳などの問題ではなく、ある図形の大きさを二倍にするというものである。なぜなら、メノンはあたかも知的な競技のごとく探求を捉えているからであり、そのメノンのパラドクスによって問われているのは人の生き方の問題ではなく、問う人と答える人によって織りなされる探求の論理の問題だからである。見方をかえるならば、著者プラトンは探求そのものを形づくっているためそれとしてあらためて問われることのない探求の論理を、想起の実験を通じて対話の前面におしだし、その可能性を明らかにすることによって探求それ自体の可能性を証明しようとしているのである。

では、ソクラテスは召使いの少年を相手として図形の問題を扱うことで、どのようにメノンのパラドクスに答えようとしているのか。次節では、このことを想起の実験を概観することを通じて明らかにしよう。

［2］ソクラテスに面積を二倍にした正方形[7]の一辺の長さを問われ、召使いの

---

[6] とはいえ、それはエレンコスの実演であり（T. Irwin, "Recollection and Plato's Moral Theory" *Review of Metaphysics* 27 (1973) p. 754)、もしメノンにとってそれがソクラテスの知のごとく映っているならば、結局ソクラテスは知の実演をメノンにして見せたことになると思われるかもしれない。 Cf. R. Weiss (2001) pp. 100-5, 126. もし想起の実験が知の獲得の実演だとすれば、ソフィストとソクラテスの違いは、そうした知を販売するという意図の有無に求められてしまうことになる。e. g. R. Weiss (2001) p. 11. このような疑念に応じるという点で、実験の相手が召使いの少年であることは大きい。なぜなら、実験の前後で変化したのは召使いの少年の（知の）あり方であり、ソクラテスがいっそう知者と見えるようになったわけではないからである。相手が名だたる市民であれば、アポリアへと導くことによってソクラテスは見かけのうえでいっそうの知者とメノンの目には映ったであろうが。想起の実験は、ソフィスト的な知恵とは異なり、少なくともソクラテスを知者と見えさせるようなものではない。

[7] テクストでは、ソクラテスが地面に描いた図形には四つの角があり、互いに等しい四つの辺をもっていると言われており、その描かれた図形を「四角形（tetragōnon chōrion)」(82b9) と呼び、正方形という用語を用いていない。ソクラテスの対話相手が召使いの少年である（すなわち奴隷である）からには、そこでの対話は幾何学の専門知識のそれではあり得ない。Cf. R.W.Sharples, 'More on Plato, *Meno* 82c2-3' *Phronesis* XXXIV/2 (1989) p. 222-3 n.6, 223 n.7, R. Weiss (2001) p.

少年は疑いもせずに「むろんそれは、ソクラテス、二倍の長さのものです」(82e2－3）と答える。もちろん誤っている。そこで、召使いの少年はつぎに一・五倍の長さと答える。そして、これもまた誤りであることが明らかになる。さいごに「対角線を一辺とすれば二倍の大きさの正方形ができる」(cf. 85b5－6）という解答がソクラテスによって提示され、召使いの少年はその答えの通りに正しく二倍の大きさの図形が作図されるとわかってしまう。この想起の実験のポイント[8]は、召使いの少年が自分の答えが誤っていると理解してしまうところに、そして正解の正しさをわかってしまうところにある。少年はどのようにその誤りと正しさを理解できたのであろうか。

それは、たとえば「作図といった視覚的イメージによる」と答えることで済ませられるものではない[9]。ソクラテスによる作図が召使いの少年の理解の助けになったとしても、問題とされるのは作図された図形が二倍の大きさとなっていないとわかってしまう、そういう事態そのものだからである[10]。そしてまた、召使いの少年はソクラテスに誘導されるがままに答えているとしても、そうであるとすればいっそう自分が知らないでいるということをわかるという事態が問題として現われるからである[11]。たとえ召使いの少年が自分の答えの間違いを理解するための何らかの方法をソクラテスから教えられているとしても[12]、た

---

85 n.21, *pace* G. J.Boter, 'More on Plato, *Meno* 82c2-3' *Phronesis* XXXIII/2 (1988) pp. 210-2, 212 n.9. 想起の実験は日々の暮らしのなかで生きていることばのうちで行われている。Cf. Lee Franklin, "The Structure of Dialectic in the *Meno*" *Phronesis* XLVI/4 (2001) pp. 419-20.

[8] 『メノン』篇の想起の実験のより詳しい分析については、田中伸司『対話とアポリア―ソクラテスの探求の論理―』(知泉書館 2005）第 6 章第 3 節を参照。

[9] Cf. R. Weiss (2001) p. 84.

[10] 藤沢令夫「解説」『メノン』(岩波文庫 1994) p. 148. 実際、一辺を三プゥスとする少年の第二の答え（83e2）の場合は、最初の答えと比べるならば、作図はそれほど大きな役割を果たしていないように見える。Cf. R. Weiss, *op. cit.* pp. 91-3.

[11] 内山勝利「対話と想起　―プラトンの哲学の「方法」―〔その二〕」京都哲学会編『哲学研究』五百六十九号、(創文社 2000) pp. 5-9.

[12] 想起の実験において、ソクラテスは三度にわたり「教えていない」ことについて注意を喚起している (82b6-7, 82e4-5, 84c11-d2, cf. 85d3, e1, 3, 6.)。ただし、このソクラテスの否定が何を意味するのかについては議論がある。ソクラテスがこの幾何学の問題の解答を知っており、そのことが召使の少年を正しい思いなしへと導くことにおいて重要な役割を果たしているからである。(ただし、解答を知っていたかという点について留保を行う研究者もいる。Gail Fine, "Inquiry in the *Meno*", *The Cambridge Companion to Plato*, ed. R. Kraut (Cambridge University Press 1992) pp. 210-211はソクラテスが知っていたのか、それとも正しい思いなしをもっているだけなのか、ソクラテスは何も主張していないと述べ、安易に知っていたと前提することを退けている。Fine自身は、ソクラテスの問いがたとえ誘導尋問だとしても、けっしてソクラテスは答えを教えておらず、召使いの少年の答えの意義が減じられるわけではないと主張している。) たとえば、R. Weiss (2001) pp. 97-107, 128-9 n.4はソクラテスが教えており、それを否定するのはメノンに対する配

んなるオウム返しを越えて、自分の答えが誤っていることを理解しているからである。実際、召使いの少年が実験のなかでソクラテスの問いに対してはじめて「私にはわかりません」(84a2) と答えるとき、その答えは少年が「知らないでいる実情のとおりに、また知っていると思いこむようなこともない」(84b1) ところにまで至っていることを現わしている。知っていると思い込んでいた事柄を自分は「知らないでいる」ということをわかるとき、召使いの少年ははじめて「わかりません」と答えることができるからである。そして、己の誤りが「わかってしまう」[13]ということによって、ソクラテスと召使いの少年の探求は成立し前進する。この「わかってしまう」ということが、問う人と答える人の間で同意としてつかみだされているのである。

とはいえ、同意というかたちで取り出されている「わかってしまう」という事態を、召使いの少年の心理メカニズムにそくして解明することは、さしあたり意味がない。ソクラテスがメノンのパラドクスに対して持ちだしたのは想起説であり、「あなたの［ソクラテスの言う想起］説のとおりだということを」(82a6) 示すべくこの実験が行われたからである。そして、ひとまずは、それは召使いの少年が知に到達することであると言えるだろう。ソクラテスは実験

慮があるためだとしている。他方、「誰かが教えたからというわけではなく、ただ問いを発した結果として、この者（メノンの召使いの少年）は自分で自分のなかから知識をふたたびとりだし、それによって知識をもつようになるのではないか。」(85d3-4) というソクラテスのことばをもとに、G. Vlastos (1965) pp. 158-160は〈想起〉が「自分のうちから」である限り、ソクラテスは教えるということはなく、召使いの少年はまさに「学んでいる」と主張する。(Vlastosはここからさらに『メノン』篇において知識が感覚経験に依存することから解放されることになったと論じている。) また、R. S. Bluck (1964) p. 13は「教える」という語義を狭めることによってソクラテスを救おうとしている。D.T.Devereux, "Nature and Teaching in Plato'*Meno*", *Phronesis* XXIII/2 (1978) p. 119, 125 n.5はここでソフィスト的な教授との対比が行われており、ソクラテスが否定する「教え」とはそのようなもののことだと主張している。H. H. Benson (1990) p. 136によれば、この教えていることの否定はソクラテスのもつ幾何学についての知が召使い少年の進展に本質的な役割を担っていないことを示そうとして描かれているのだとされる。また、A. Moravcsik (1971) p. 65は教えることの否定において問いと答えとの落差としての「理解」が浮かび上がると指摘している。そして、A. Nehamas (1985) p. 19は教えていることの否定によってソクラテスが「その対話相手が自分で本当だと思ったことのみに同意する」ことを求めていたのだと解釈している。なお、プラトンにおける「教授-学習という対概念」に関しては、加藤信朗『初期プラトン哲学』(東京大学出版会 1988) p. 272 n. 26を参照。

[13] Cf. R. Bluck (1964) p. 13, W. K. C. Guthrie *A History Of Greek Philosophy,* vol.4. (Cambridge University Press 1975) p. 255, N. White (1976) p. 60-1 n.41, D. Scott (1995) p. 46 n.23. なお、召使いの少年との対話においては、「わかる」という意味の語はあまり使用されていない。gignōskeis (82b9)、ouk oida (84a2)、manthaneis (84d4)、ou manthanō (85a4-5) 等である。それに比して、実験の合間に交わされるメノンとの対話では、召使いの少年の知的あり方をめぐり、「わかる」という意味のこれらの語が頻出する。

を終えたときに、つぎのようにメノンに問うている。

「誰かが教えたからというわけではなく、ただ質問した結果として、この者（召使いの少年）は自分で自分の中から知識をふたたび取りだし、それによって知識をもつようになる（epistēsetai）のではないか。」(85d3－4)

メノンは同意する。しかし、正確にいえば、実験を傍で見ていたメノンが（そして読者が）確認したのは知に到達したことではなく、せいぜい「正しい思わくが内在している」(85c6－7）ことでしかない[14]。というのも、上述のように、「正解」はソクラテスが提示したのであり、召使いの少年はそれが正しいとわかるかどうかを試されているだけだからである。上記の引用でも、ソクラテスは未来時制を用いて「知識をもつようになる」と慎重な言い回しをしており、知に到達したとは尋ねていない。実際、ソクラテスも想起説の証明についてはつぎように限定を加えている。

「そう、じつはね、ぼくも自分でそんな気がするのだよ、メノン。ぼくは、ほかのいろいろの点については、この説［想起説］のためにそれほど確信をもって断言しようとは思わない。ただしかし、ひとが何かを知らない場合に、それを探求しなければならないと思うほうが、知らないものは発見することもできなければ、探求すべきでもないと思うよりも、わたしたちはよりすぐれた者になり、より勇気づけられて、なまけごころが少なくなるだろうということ、この点については、もしぼくにできるなら、言葉のうえでも実際のうえでも、大いに強硬に主張したいのだ。」(86b6－c2)

このソクラテスのことばを重視するのであれば、想起の実験もそして想起説も、メノンのパラドクスを論理的に解消することはできず、かえってそのアポリアを引き受けたうえで倦むことなく探求する価値のあることを、あるいは価値があるという可能性のあることを示したということになる[15]。そして、テク

---

[14] 正しい思わくと知との間には一応の断絶がある。一応のと限定を付したのは、「原因（根拠）の思考によって縛りつけ」(98a3-4）られ知となり得るからである。なお、正しい思わくと知との関係については、T. Irwin (1977) p. 139, G. Fine (1992) p. 209, T. Irwin, Plato's Ethics (Oxford University Press 1995) p. 132-3は肯定的に、A. Nehamas (1985) p.16-17は否定的に評価している。

[15] 金山弥平 (2005) pp. 67-70.

スト上は、メノンはソクラテスとともに探求へと向かうことに同意している。もっとも「おっしゃることは正しいように思われます」(86c3) と言いつつも、メノンは「徳がそもそも何であるのか」(86c5－6) を探求しようと言うソクラテスに従わず、対話篇冒頭に自分が提示した「徳ははたしてひとに教えることができるものなのだろうか」を探求したいと発言している。しかし問題は、実験が想起説の何を「そのとおりだと」(82a6) 明らかにしたのかということにある。想起説は正しい思わくの内在や探求への説き勧めを言っているのだろうか。

そこで、そもそも想起説がどのように語りだされたのかを振り返っておこう。ソクラテスは「神々の事柄について知恵をもった男や女の人たちから聞いた」(81a5－6) 話をはじめに提示している。

「彼らの言うところによれば、人間の魂は不死なるものであって、ときには生涯を終えたり―これがふつう死と呼ばれている―ときにはふたたび生まれてきたりするけれども、しかし滅びてしまうことはけっしてない。このゆえにひとは、できるだけ神意にかなった生を送らなければならぬ。」(81b3－7)

そして、ピンダロスの詩の一節を論拠として挙げ、つぎのように主張する。

「魂は不死なるものであり、既にいくたびとなく生まれかわってきたものであるから、そして、この世のものたるとハデスの国のものたるとを問わず、すなわちいっさいのあらゆるものごとを見てきているのであるから、魂がすでに学んでしまっていないようなものは、何ひとつとしてないのである。だから、徳についても、その他いろいろの事柄についても、いやしくも以前にも知っていたところのものである以上、魂がそれらのものごとを想い起こすことができるのは、何も不思議なことではない。なぜなら、事物の本性というものは、すべて互いに親近なつながりをもっていて、しかも魂があらゆるものをすでに学んでしまっているのだから、もし人が勇気をもち、探求に倦むことがなければ、ある一つのことを想い起こしたこと―このことを人間たちは学ぶと呼んでいるわけだが―その想起がきっかけとなって、おのずから他のすべてのものを発見するということも、充分ありうるのだ。それはつまり、探求するとか学ぶとかいうことは、全体として、想起することにほかならないからだ。」(81c5－d5)

一見すると、想起説は「魂の不死性」や「知の先在性」という主張であるように思われる。これらの点では、当然のことながら、想起の実験は「あなたの説のとおりだということ」(82a6) を示したとは言えず、そもそもそのような事柄を明らかにしようとは意図されていないと考えられる。前述の実験後のソクラテスのことばを念頭に想起説を読み返すならば、つぎの二点が注意されるであろう。第一に、「できるだけ神意にかなった生を送らなければならない」(81b6－7) ということばに現われているように、想起説はわたしたちの「生の在りかた」に関心をおいている。第二に、探求を想起と呼ぶことによって、「ある一つのことを想い起こしたこと」(81d2) をきっかけに「おのずから他のすべてのものを発見する」(81d3) 可能性を主張しているということである。もしこれらの二点が想起の実験の眼目であるならば、「魂の不死性」と「知の先在性」は想起の実験の対象ではなく、むしろその前提であることになる[16]。

想起説をこのように把握するとすれば、メノンのパラドクスと想起の実験はつぎのように解釈されるかもしれない。すなわち、メノンが提出した探求をめぐるパラドクスは、それを口にする当人にとってはたんなる知的なゲームのつもりであろうとも、わたしたちの倫理を蝕んでいく。そこでソクラテスは、想起の実験を通じて探求の可能性を確認し、そして倦むことなく探求することによって「よりすぐれた者になり、より勇気づけられて、なまけごころが少なくなる」(86b6－c2) ことを説き勧めたのだと[17]。想起の実験は、実践的な、あるいは実存的な局面において、メノンのパラドクスに応えようとしているのだと解されることになる。

とはいえ、「魂の不死性」と「知の先在性」を前提として持ちださなければ、あるいは、探求を想起として把握しなければ、このようなソクラテスの探求の意義を述べることはできないのだろうか。実験の途中でソクラテスがメノンに「(召使いの少年が) しかるべき想起の仕方で、つぎつぎと想起していくのを観察したまえ」(82e12－13) と告げているが、そのときの少年の想起を認める前提に「魂の不死性」と「知の先在性」が不可欠だとは、『メノン』篇の読者は思えないであろう。むしろ、たとえ「それほど確信をもって断言しようとは思わない」(86b7) とは言われようとも、「魂の不死性」と「知の先在性」にまで議

---

[16] 中畑正志「プラトンにおける知識とドクサ」『理想』第 633号 (1986) p. 215. Cf. G. Fine (1992) pp. 213-215.

[17] 金山弥平 (2005) pp. 47-73の解釈。同論文は「ソクラテスの勇気を少しでも分けもつ道は・・・倦むことなく探求に邁進すること、それに尽きるのである (86B7-9)」(p. 70) と結論している。

論を広げざるを得ない理由を、あるいは探求が想起としてつかまれなければならない何かを問うべきではないだろうか。

次節では、想起説の含意を考察しこの問いへの答えの見通しを提示し、本稿の結びとしたい。

[3] 探求を想起として捉えることによって、探求についての理解はどのような違いを生じるのだろうか。

まず、対話のなかで同意というかたちで取りだされる「わかってしまう」という事態は、その探求が想起と捉えられることによって、問う人と答える人の間に見いだされるという位置づけをはみだしていくことになる。たしかに探求のなかでの「わかってしまう」という事態は個別的なあるいは一回的な事象のように、まったく個人的とさえ見える。しかし、想起説にそくして考えるならば、そのような個別的な事態である「ある一つのことを想い起こしたこと」(81d2) は、それをきっかけに「おのずから他のすべてのものを発見する」(81d3) ことによって、「この世のものたるとハデスの国のものたるとを問わず、すなわちいっさいのあらゆるものごと」(81c6－7) へとつながっていく。というのも、「事物の本性はすべて互いに親近なつながりをもっている」(81c9－d1) からには、それはたんなる一回的で個人的な出来事ではあり得ないからである。換言すれば、わたしたちの探求はたんなる相互承認や相互理解をはるかに超えた局面において可能とされていることになる。

しかも、そのような局面へわたしたちは想起において何ほどか触れるのだとすれば、それはアポリア（行きづまり・隘路、aporia）において触れることになる。たとえば、前述の、想起の実験において召使いの少年について「つぎつぎと想起していく」(82e12) と呼ばれた探求の場面とは、かれが提示する答えがつぎつぎと論駁され、「私にはわかりません」(84a2) と口にするまでの過程である。そのときの少年をソクラテスは「この子はすでに自分が困難に行きづまっていること（aporein）を自覚して、知らないでいる実情のとおりに、また知っていると思いこむようなこともないのだ」(84a7－b1) と評価している。しかし、アポリアに留まることはわたしたちには困難であり、不可能とさえ思える[18]。実際、わたし個人の思いなしを捨てアポリアに留まる、あるいはアポリ

[18] セーレン・キェルケゴール（山下秀智訳）『死に至る病』（創言社 2007）の第二編第二章はこの問題を精確に捉えている。たとえば、「数知れない多くの人が、ソクラテス的無知を越えて、更に進もうという衝動を感じたことであろう、―それは恐らく彼らが、無知に立ち留まることは不可

アを引き受けると言っても不明瞭であるのに比して、探求における困難にぶつかったときにこそ「もろもろの事物に関する真実」(86b1) に触れつつあると言われることは、わたしたちを鼓舞し得るであろう。すなわち、「困難に追いこんで行きづまらせ (aporein ... poiēsantes)、痺れさせ」(84b6) られているときを、想起しつつあると語ることによって、わたしたちはアポリアの困難に怯えずに済み、「より勇気づけられて」(86b8－9)「探求しなければならないと思う」(86b7－8) ようになることが期待されている。

このように、想起は見失われている全体とのつながりへの回帰であるとすれば、それは魂不死の論拠であったピンダロスの詩にあるように「上なる陽のかがやく世へ」(81b9) の回帰であり、「この世のものたるとハデスの国のものたるとを問わず、すなわちいっさいのあらゆるものごと」(81c6－7) は理想化された姿で現われることになるのかもしれない。いっさいを知る不死なる魂の「いくたびもの生まれかわり」(81c5) が、ピンダロスの詩によって、美しく彩られているように (cf. 85c1－4)。

これらすべては、ソクラテスが「ほかのいろいろの点については、この説［想起説］のためにそれほど確信をもって断言しようとは思わない」(86b7) と述べていたように、想起をかたることばをめぐり思わくを廻らしたという域をでていない。とはいえ、プラトンの読者にとっては、こうした含意がソクラテスの探求を彩っている。召使いの少年との対話は、想起の実験であるとともに、ソクラテスの探求のモデルでもあるからである。『メノン』篇において、「事物の本性 (physis)」(cf. 81c9) や「もろもろの事物に関する真実 (hē alētheia ... tōn ontōn)」(86b1) は、たんなる「抽象」や「帰納的一般化」によってではなく、ついには想起によって捉えられるということが、強く印象づけられることになるのである[19]。たとえそれが試験的・過渡的段階にあるにせよ、対話篇冒頭部において「知恵の旱魃」(70c4) と評される無知の自覚が、想起を語ることにおいて、わたしたちを惹きつける回帰へと変貌しているのはたしかである。人と人の間において失われたもの、消え失せて不在であるもの、それ自体は回帰しないものを、自らの「魂の中に」(86b1－2) 発見する可能性[20]を垣間見せてくれると思えるからである。ただし、このような回帰の倫理性にはまた別の仕方で

能に思えたからであろう」(邦訳 p. 120)。想起説の含意を推量り、ソクラテスとプラトンとの区別を無みするかもしれぬ本稿は、幾度もソクラテスの名を呼ぶべきなのかもしれない。

[19] 藤沢令夫 (1994) 146-7.

[20] 想起とはまた、「自分で自分の中にふたたび把握しなおすこと」(85d6) である。

問われるべき問題がある。